

# 日本文学部会

## 【概要】

高 萌\*

### はじめに

第18回国際日文学コンソーシアム日本文学部会は2023年11月4日午後に開催された。本年度のテーマは、「日本文化の中のバーチャル」である。学生3名と教員1名の研究報告が行われた。以下、登壇順に各報告の内容と質疑応答の概要を報告する。

### 1、曹 怡（お茶の水女子大学 学生）

#### 「京極派歌人の『柳』詠考—水墨画との関係について—」

曹氏は柳歌を取り上げ、京極派和歌に詠まれた風景と水墨画との関係性を論じた。曹氏は二十一勅撰和歌集の中にある柳を詠む歌を検出し、『風雅和歌集』の秋冬部にある柳歌には新たな世界が形成されていたことを指摘した。また、梅と柳を並列する表現に注目し、京極派の「梅柳」詠が、『詩人玉屑』に収められた漢詩と共通することを論じた。「梅柳」関連の水墨画作品を挙げて、京極派の歌の風景は、当時の水墨画の鑑賞に繋がられ、さらに、冬景図・春景図の中に描かれる梅柳が当時の歌人の創作の種になったと指摘した。曹氏は冬の柳詠について、「枝さびて」などの新しい表現を考察し、「疏柳寒鴉図」の独特の閑寂美の世界は「枯木寒鴉」などに関する水墨画作品からの影響が与えられたと指摘していた。新風を唱

えた京極派和歌、特に絵画趣味を持っていた花園院周辺は水墨画内容と関係があると結論した。

質問応答では、梅の花は友人との別れを惜しむ意味を持っていることに関する質問があった。曹氏は『万葉集』の時期に別れを惜しむ意味として用いていたが、それ以降はそうした使い方がほばないと述べた。

### 2、鄭子焜（台湾大学 学生）

#### 「夏目漱石『こころ』論—家制度から脱出するKの行動分析—」

鄭氏は『こころ』におけるKの家族像に注目し、「家制度」の時代背景に合わせ、Kの行動の背後の葛藤を論じた。鄭氏は「家」、「家制度」、および「家父長制」に関する概念に従って、「家」に焦点し、Kの家族像を分析した。鄭氏はKの目覚め、Kの行動、およびKの彷徨という筋で考察を行った。

鄭氏はKの人物像を検討し、「父の感化」「生まれた家」「寺という一種特別な建物」という「家」と関連のある要素がKの人格形成に影響を与えたと指摘した。Kが抱いた「精進」精神は禁欲主義よりもっと深刻な意味を含んだと論じた。次に、Kが家から脱出する決意をめぐって、Kは家制度への戦いと「道」を追求する自由を手に入れることを論じた。最後に、家から脱出したKの「求道」と「仕事」を両立させる難関に注目し、Kが精神的な窮境に陥ることを検討した。鄭氏は明治時代の時代背景を踏まえ、今後の課題を未亡人とお嬢

\*お茶の水女子大学・院生

さんたちから構成された疑似家族の下の家父長に関する考察にするとしていた。

### 3. 洪瑟君（台湾大学 教員）

#### 「金子光晴の児童文学」

洪氏は金子光晴の児童文学作品の内容を発表時期や編集方針や時代背景などとともに分析し、金子光晴の児童文学作品における「戦争」の意味を論じた。

洪氏は大正13年から昭和18年までの間の時期における、金子光晴の子供向けの作品に対する研究は意義があると指摘した。金子光晴の児童作品の多数は童話作品で、得意とする詩は意外に少なく、舞台は概ね西洋に設定された。洪氏は金子光晴の児童作品に関する先行研究を再検討し、「戦争」における描写から表現したいものについて論述した。また、洪氏は大正13年から昭和18年まで、各年に発表した作品数と発表先を挙げて、『少女倶楽部』、『婦人子供報知』（金子光晴の作品を掲載する雑誌）の編集方針を考察する先行研究とともに論述した。最後に、洪氏は「戦争」と関連がある童話の発表時間、発表先と童話舞台をまとめた。

### 4. 王一飛（北京外国語大学・北京日本学研究中心 学生）

#### 「フィクションにおける「核」のノンフィクション—『風の谷のナウシカ』と『モスラ』の怪獣表象—」

王氏は初代『ゴジラ』が公開された年（1954年）が「第五福竜丸事件」のあった年であるという視点から、『ゴジラ』は戦争に対する記憶を喚起する「核」のメタファーと戦争のメタファーという両義性を持っていると指摘した。次に、1961年に公開された『モスラ』は「怪獣」をたおさなければならぬものから解放し、新たな可能性を示し

たと論じた。王氏は『風の谷のナウシカ』（1984年公開）の中に描かれた「王蟲」と「巨神兵」は戦後日本大衆文学における「怪獣」の表象と繋がりががあると指摘した。「王蟲」の原型は「モスラ」であり、「巨神兵」は「核」の恐ろしさと「科学万能主義」の傾向を捉えて描かれたものであると論じた。最後に、「怪獣」というものは、現実問題を可視化するものであり、「核」の問題、更に科学と戦争の問題を示していると指摘した。

以上、日本文学部会における研究発表についてまとめた。今年度の日本文学部会の内容は和歌から映画まで幅広い範囲にわたった。古代日本の作品からデジタル技術がもたらす新たな作品までの研究テーマにめぐって、各自の意見を交流した。発表内容の範囲が非常に豊富で、有意義な部会だと思ふ。